

涙と笑顔の「飯」

草加市立新栄小学校 五年
秋 山 遥 香

私は、白いご飯が大好きだ。もちもちしていて、食べると不思議と力がわいてくる気がするからだ。うちではいつも運動会やマラソン大会の前にはパンやめん類ではなく、白いご飯だ。その方が少しでも速く走れるからよと、わらいながらお母さんが大盛りをよそってくれる。なかなか、お母さんが言うような結果にはならないけど、やつぱりうれしくなっていただきますと大きな声でこたえるようにしている。

私の一番好きな組み合わせは、白いご飯に、お母さんの作ってくれた鮭のムニエルだ。生鮭に塩コショウをたっぷりふってバターでやく。すごく美味しい。いつ食べても、何回食べてもあきない、私の大好物メニューである。

「明日は、鮭のムニエルだといいなあ。」
と思った。

そんなある日、とつぜん私は何も食べられなくなった。食べないのではなく、食べたとしても食べ物を見ただけで、いや、考えただけでも気持ち悪くなる、そんな状態だった。食べ物だけではなく、お水も気持ち悪くなってしまった。もう何日もご飯をちゃんと食べていない。お水もちよつとしか飲めない、そんな日が続いた。フラフラになった。起きていることもしんどくなり、横になってばかりだった。お医者さんは、「脱水だね」と言って、点滴をしてくれた。その日から二日に一回病院に通って点滴をもらった。私の手首は点滴の針のあとであざだらけになってしまった。私は、自分のうでを見て、悲しくなった。

「こんな体じゃダメだ。食べなきゃ。飲まなきゃ。でも実さいはダメなんだ。」

ご飯を食べること、水を飲むこと、人間生きていくのにあたりまえのことができない。それがくやしくて泣いてきた。あつという間に体重も数キロやせてしまった。このまま、一生こんな生活をしなければいけないのかな。そう思う不安な日が続いた。

お母さんが「気晴らしに。」と言い、いなかのおばあちゃん家に泊まりに行くことにした。おばあちゃんは心配そうな顔をしながら何も言わずに、鮭のムニエルを作ってくれた。何も言われなくても、私にはおばあちゃんの気持ちがいいたいほど伝わってきた。

「少しでもいいから食べられますように。」

いつもならいやだと思ってしまう食べ物その日はどういうわけか食べてみようという気になった。しばらくぶりの食事にはしを持つ手がぶるぶるとふるえた。一口、ご飯を食べてみた。ものすごく美味しかった。温かかった。鮭も食べた。やつぱりすごく美味しい。当たり前にご飯が食べられるということがどんなにうれしいことか。私は、初めて知った気がする。お母さんも、おばあちゃんも大喜びだ。美味しいご飯には、涙より笑顔が似あうと思った。